

誇り高き市民ルソー

小林 善彦

ルソーはその著作の扉のページに、「ジャン＝ジャック・ルソー、ジュネーヴの市民」と記したことはよく知られている。また『告白』の第一巻のはじめでも、「私は一七一二年にジュネーヴで、市民イザーク・ルソーと市民シュザンヌ・ベルナールとのあいだに生まれた」⁽¹⁾と書いてある。実をいえば、ルソーがこの文章を書くより一年以上まえに、彼はジュネーヴの状況に失望して、市民権を放棄していた。それにもかかわらず、自分の父も母も「市民」であつたとわざわざ書いたのは、彼がこの身分ないし資格に、誇りと関心を持っていたことを示すものである。

ジャン＝ジャックは十六歳でジュネーヴを逃亡し、社会の最底辺まで落ちてしまったのだが、その後なみなみならぬ努力によって、思想家、文学者、音楽家ルソーとなつた。その原動力となつたのは、「自分は市民だ」という意識と誇りではなかつたかと思う。しかし、その点を指摘する研究は、不思議なことだが、私の知るかぎりはない。⁽²⁾ルソーの思想形成は、ジュネーヴの精神的風土の影響だという人はいる。⁽³⁾それは確かである。だが、人

口二万以上のジュネーヴから、「私は自分が見たどの人のようにもつくられてはいない」⁽⁴⁾という、ただ一人のルソーがどうして出てきたのか。ジャン・ジャックは親方のもとで徒弟になり、その後フランスでは貴族の下僕になったり、スイスやフランスでは、ほとんど無一物で放浪したこともあった。十八世紀のフランスには、下僕や放浪者は数多くいたが、そのなかからただ一人、ジャン・ジャックだけがルソーになった。環境だけが人間を作り、存在だけが意識を決定したわけではないだろう。ジャン・ジャックの心のなかに、彼独特の「ジュネーヴ市民」の誇りが、大きく働いたからではないだろうか。誇りの意識が人間を作り、思想形成のささえになったというのは、假説であり、推量にすぎないという人がいるかも知れない。しかし、ルソーの書いたものを注意して読めば、その推量を裏付けるような証拠が、少なからずある。それを示してみたいと考えた。以上のような視点から、十八世紀におけるジュネーヴの状況と、ルソーにおける市民の誇りの意識についてのべてみたい。

一、ジュネーヴの状況とルソー

まずはじめに、ルソーが自分の著作に「ジュネーヴ市民」と記した作品を調べてみると、「⁽⁵⁾学問芸術論』『人間不平等起源論』『ダランベールへの手紙』『サン・ピエール師の永久平和論の抜粋』『エミール』『クリストフ・ド・ボーモンへの手紙』などがあげられる。「ジュネーヴ市民」の肩書が最初に現われる『学問芸術論』(一七五〇)は、デイジョンのアカデミーの懸賞に応募し、当選した論文であるが、この肩書は受賞のあと、出版する時になって、あとからつけ加えられたものであった。したがってその論文を審査し、賞を與えたデイジョンのアカデミ

―会員たちは、論文の作者をフランス人だと思っていたという。⁽⁷⁾ いまわれわれがルソーのテキストを見ても、作者がフランス人ではないと思わせるような点は、まったくない。それどころか、フランスのことを「わが国民」と呼んでいる文章さえある。⁽⁸⁾

ルソーがはじめて、自分はジュネーヴの市民だと公然と名のつたこの時期は、われわれに重要な手がかりを與えてくれるのだが、それはさておき、彼がジュネーヴ市民としての自覚をはじめて持ったのは、この時期ではない。むしろ、幼少の頃から心のなかに持ち続けてきた意識が、当時の学問、芸術の場であったパリの社交界とどうしても両立できず、社交界への同化は到底不可能との認識に至ったルソーは、一転して学問、芸術のあり方を批判し、したがって社交界をも批判するようになって、公然と表に出たのだと考える。

ところで、十八世紀のジュネーヴにおける「市民」とはなんであったのか。十六世紀以来「カルヴァンの都」として知られたジュネーヴ共和国には、つぎの五つの階級、または身分の区別があった。⁽⁹⁾

- 1、市民 *citoyen* ジュネーヴで生まれ、市民または町民の子息である者。
- 2、町民 *bourgeois* 市民、町民の子息で、ジュネーヴの外で生まれた者。
- 3、出生民 *natif* 住民の子息で、ジュネーヴで生まれた者。
- 4、住民 *habitant* 外国人でジュネーヴに居住を許された者。
- 5、隷属民 *sujet* 市外のジュネーヴ領に住む農民や傭兵など。

以上のうち、市民と町民の二つの身分には参政権が認められ、全体会議 *Conseil général* のメンバーとして投票権を持っていたが、選ばれて主要な役職に就くことができたのは、市民だけで、町民には被選挙権がなかつ

た。またこの二つの身分は、産業、経済の活動に關しても、さまざまな特権を興えられていた。たとえば、古くから今日にいたるまで、スイスが誇りとする時計産業は、当時職人の手作りによるものであったが、時計の製造は市民と町民のみに許された特権的職業であった。

さて、参政権を持った市民と町民は、全体会議を作っていたが、その数は千人から千五百人ぐらい。当時のジュネーヴの人口は二万人から二万五千人と推定されている。⁽¹⁰⁾ただし、市民と町民は成年男子に限られるから、⁽¹¹⁾かりに一族の人数を四人か五人とすれば、実際には成年男子の四人に一人ぐらいは、市民か町民ということになり、日本の士族のような少数派ではなかったと考えられる。全体会議はいわば直接民主制の政治制度を表現しているが、日常の政治は終身任命の二十五人より成る小会議Petit Conseilが行い、全体会議と小会議の二つの会議の間には、二百人会議Conseil de Deux Cents（実際は二百五十人程度）があつて、このメンバーは小会議によって選ばれていた。

一方、宗教と風俗の問題については、小会議と事務局Conseil de la Villeとが監督をしていた。すなわち、カルヴァンの教えにしたがつて、厳しい統制を布き、たとえば信仰の目的なしで、楽しみを目的とする会合は、一七三四年になつてはじめて許されたほどであった。しかもそれらの会合は嚴重な監督を受けた。また男女は嚴格に分けられ、たとえ家庭のなかといえども賭けごとは禁止され、さらに演劇の上演も禁じられていた。

このように、ジュネーヴは他の国から見れば、まったく味気ない大まじめな町であつたが、それにもかかわらず、ジュネーヴはある面では自由な都市であり、王候貴族の支配する国に圍まれながらも共和国であつた。十七世紀の末、フランス王国では、ラ・ブリュイエールもいうように、宗教や政治の問題で批判的な意見をのべるこ

とは、「禁ぜられていた」のに対して、ジュネーヴでは逆で、厳しい監督のもとにありながらも、人びとは政府（統治）について、宗教について、モラルについて、議論するように仕向けられていた。たとえば、一七六一年から六八年の間だけでも、ジュネーヴで出版された政治関係の論文や著書は五七点に達するという。⁽¹²⁾このあたりに、教会への「服従」を特徴とするカトリックの国と、各人が毎日聖書を読んで、自分の信仰を自分で構築するカルヴァン主義との相違が見られる。

このようにジュネーヴでは、古代ギリシア・ローマの都市国家にも似た民主制が行なわれ、そこでは「市民」はもつとも高い階級、あるいは身分であったから、ルソーが市民であることを誇りに思ったのは当然であった。しかしながら、現実のジュネーヴは、たてまえからは程遠い状態にあった。すなわち、全体会議は二百人会議が指示した議題しか取り扱わず、その議題もすべて小会議が選ぶようになっていたし、市長（複数などの慣例的な選挙のほかに、全体会議が開かれることは長い間なかった。また職人や商人が二百人会議に入ること、実際上は不可能で、二百人会議と小会議とは、少数の富裕な家族によって占められ、一種の貴族政治の形をとっていた。

これに対して、政治的権利を奪われた市民、町民の抗議と反抗がしばしば起こっている。とりわけ一七〇七年の意義申し立ての運動では、リーダーのピエール・ファチオ Pierre Fatio は銃殺され、他の三人のリーダーのうち二人は死に、一人は追放されるという事件が起こった。⁽¹³⁾この時、ルソーの祖父ダヴィッド・ルソー David Rousseau は、この運動に同情を示したため、市政府から要注意人物とみなされ、地区の風俗の監督の役職を解かれていた。⁽¹⁴⁾ルソーはこのことを父イザークから聞いて知っていただろうか。そうとは思えない。なぜならば、

イザークはジャン・ジャックが十歳の時に、ジュネーヴを逃亡しているし、『告白』をはじめとするルソーの作品には、一七三六年に九十六歳まで生きて、ジュネーヴに住んでいた祖父ダヴィッドについて、奇妙にもほとんど言及がないからである。⁽¹⁵⁾ そもそもイザーク・ルソーは、一七〇五年から一七一一年までの間、コンスタンチノーブルに行っていたから、一七〇七年の争乱を見ていない。

「ルソーの『社会契約論』（二七六二）の五十年まえ、彼の思想のもっとも大胆な原理のいくつかを、下町の政治思想はすでに表現していた」と評する人もあるのだから、ルソーはその思想的立場からいえば当然、この権利要求の運動を支持するはずであった。だからこそ、彼の『社会契約論』も『エミール』も、ジュネーヴでは禁止されたのである。しかしルソーは、この争乱から一步退いた位置に身をおいていた。一七三七年八月にはまた争乱が起こり、ジュネーヴ市当局はベルン、チューリヒの応援を得て、反抗を抑えこむのであるが、ちょうどこの時ルソーは二十五歳の成年に達し、母親の遺産を受け取るためにジュネーヴに来て、この争乱を目撃する。事件を物語る『告白』第五巻では、ルソーと親しかったパリオ父子が、敵味方に分かれた様子をつぎのようにのべている。

「父と子が武器を持ち、一人は市役所へ、一人は自分の地区へ向かって、同じ家から出て行くのを見た。二時間後にはおたがいに向かい合って殺し合うのを確信してである。この恐ろしい光景は、私に非常に強い印象を與えたので、もしも市民の権利に戻ることがあっても、けっしてどんな内乱にも加わらず、行動によっても言葉によっても、けっして武器に訴える自由を支持すまいと誓った。⁽¹⁷⁾」

いうまでもなく、この『告白』の文章は、三十年もたったあとで書かれ、ルソーはすでにジュネーヴに失望し

て、みずから市民権を放棄しているのであるが、それにしても自分でも認めているように、「穏和な態度」である。

ミシエル・ローネによれば、十八世紀のジュネーヴはひとつではなく、「二つのジュネーヴ」に分かれていたという。すなわち、一方は権利を奪われた市民、町民が、無権利な大衆と連帯した下町、他方はかつらをかぶった貴族、牧師たちより成る腐敗した山の手で、この両者は時に武器をとって戦い、和解があったとしても、それは長い内戦に必要な休止にすぎなかったのだという。⁽¹⁸⁾ローネは、ルソーがこの下町サン＝ジェルヴェの人たちと、同じ立場に立つことを証明しようとしているのだが、それならばなぜルソーは、この運動にもっと共感を示さなかったのだろうか。ルソーの意識はもう少し複雑だったのではないか。

二、父親イザークとルソー

つぎにルソーの生涯をたどりながら、彼の心のなかの「市民の誇り」が現われている点を追ってみたい。ジャン＝ジャックが一七二二年に生まれた家は、ジュネーヴの富裕な階級の人に住む山の手の、グラン・リュGrand Rue四十番地、母親シュザンヌの家であった。洗礼を受けたのも、上流階級の人たちが通うサン＝ピエール大教会で、富裕な羅紗商人ジャン＝ジャック・ヴァランサンが名付け親になっている。記録によれば母親のシュザンヌは、彼女の母から一万フロリン、牧師の叔父からは六千フロリンと蔵書、それに三万一千フロリンの価値とされる家を引き継いでいるのだから、かなりの財産家といえる。一方、父親のイザークは、兄弟姉妹六人

ということもあるが、引き継いだ財産は千六百フロリンで、民衆的な権利要求運動の中心地、サン＝ジェルヴェ地区の人であった。⁽¹⁹⁾ただし彼には政治的な関心はあまりなかったようである。

このようにジャン＝ジャックの父と母は、財産も家も格差があり、住む地区も大衆の下町と上流階級の山の手と違っていた。そして父親イザークは、ジャン＝ジャックが生まれた時、妻の山の手の家に住んでおり、ジャン＝ジャックが生まれて十日後にシュザンヌが死んでも、一七八年まで同じ家に住んだ。しかしその間イザークは、時計職人として「この仕事ではじつさい父は非常に巧みであった」と『告白』でいわれながら、じつは少しも成功せず、結局住んでいる家を売って、⁽²⁰⁾自分の生まれ育った下町のサン＝ジェルヴェ地区へ移り住む。明らかにルソー父子は、落ちぶれつつあった。八歳のルソーにそれがどこまで分かったかは知らないが、多くの研究の語るところによれば、父親のイザークはそれでも、上の身分の人たちのように振舞っていたようで、紳士の趣味である狩獵を行ない、当時の職人の習慣にはないのに、剣を帯びていたようである。というのは、彼は何度か人と争って喧嘩をし、宗務局から叱責を受けているのだが、その調書によれば、「剣を抜いた」ことをとがめられている。そして最後には、喧嘩がもとで一七三二年、ジュネーヴを逃亡してしまふ。

ただイザークには、ジュネーヴの他の職人も同じだが、パリの時計職人にはない特徴があった。パリの時計職人は時計の話しかできず、手を使うことを学ぶだけだが、ジュネーヴの時計職人は、市民と町民のみに許される特権的な職業であり、彼等はしばしば教育があつて、政治や市の管理運営に関心を持っていた。またジュネーヴの職人には、小説、通俗科学、歴史、法律などの本を読む者が多かったという。『不平等起源論』につけた「ジュネーヴ共和国にささげる」という献辞のなかで、ルソーは父親のことをつぎのように描いている。

「私は彼（イザーク）の前に、その仕事の道具にまじって、タキトウスやプルタルコスやグロティウスの作品を見ます。」⁽²¹⁾

『告白』の第一巻にも、ルソーの幼年期の読書の目録が出ている。ただしそれらの書物は、父イザークのものではなく、母および母の叔父の蔵書であつたが。⁽²²⁾

さて、イザーク・ルソーは、時計職人としてあまり能力がないのか、あるいは仕事熱心ではないのか、よく分らないが、わずかな財産を使つてしまひ、妻の遺産まで食いつぶして、家売り、山の手から下町へ下りるのだが、自尊心だけは強く、貧しいのに身分の高い人のように振舞つていた。くさつても彼は「市民」だったのである。この誇りはジャン・ジャックに間違いなく伝わつたし、また伝わるように彼は育てられた。

ルソーが一七四二年に書いた『パリゾ氏への書簡詩』には、つぎのような詩句が見られる。

私は教えられました。私は生まれによつて最高権力を分有する権利を持ち、

いかに小さくても、弱く名もない市民でも、私は主権者の一員であることを。⁽²³⁾

また『告白』でも彼はつぎのようにいつている。「国王の子供たちといえども、私の幼時ほどの熱意をもつて、世話をされることはないだろう。……私は父の家を出る時まで、ただの一度も街中に出て、他の子供たちといつしよに駆けまわることを許されなかつた。」⁽²⁴⁾父親はおそらくジャン・ジャックに、お前はそのへんの街つ子とは違つて、市民なのだと教育したのであらう。さらに先で彼は「民衆people」とはちがつた風習の家に生まれた」といつている。この意識は徒弟になつてもなお続く。ジャン・ジャックは仲間の徒弟のなかにとけこんでいる。「仲間の楽しみは退屈だつた」と彼はいい、ジュネーヴを逃亡することになる一七二八年三月十四日の日曜

日に、「仲間たちは説教のあとで、いっしょに遊びにいく」と誘いに来るのであった。私はできれば彼らから逃れたかったのだが……」と語っている。⁽²⁷⁾

街の子供たちや仲間の徒弟たちと、自分は違うのだという気持ちは、たんに父親から教えられた「市民の誇り」だけでは、長く続かなかつただろう。しかしこの誇りには、読書と知識という内容の裏付けができていたので、もはや仲間とはよろこびと楽しみが違っていたのである。いい方を変えれば、徐々に落ちぶれつつあるルソー親子にとって、「市民の誇り」を持続させるためには、読書と知識で優れている必要があった。主権者たる者、文章を読み、文をよくすべしとの家庭の教育が、すでに実を結んでいたのである。この点は父親イザークの功績といつてもよいかも知れない。

ルソーの読書、というよりは読みの練習については、『告白』第一巻にくわしく記されている。イザークが読書家とはとても思えないが、さいわい家には彼の妻シュザンヌが遺した小説と、シュザンヌの叔父で牧師ベルナールの書物があつた。ルソー親子はこれらの小説や歴史や思想などの本を読むが（正確には発音するが）、とりわけブルタルコスは、幼いジャン・ジャックにもその内容が理解できたし、また強い影響を受けた。

「ブルタルコスはとりわけ、私の好みの読書となった。……これらの興味深い読書と、それが父と私とのあいだにひき起こした会話から、あの自由で共和主義的な精神、束縛と従属とを我慢できないあの不屈で誇り高い性格が形づくられた」⁽²⁸⁾

「たえずローマとアテナイに心を奪われ」たジャン・ジャックは、「自分をギリシア人かローマ人と思っていた」⁽²⁹⁾のだが、それは同時にジュネーヴ共和国と重なり合つて、ジュネーヴへの幻想が作られる。現実の貴族政治の

ジュネーヴとはまったく異なった、のちに『不平等起源論』につけた「ジュネーヴ共和国にささげる」のなかに描かれた民主的な都市国家ジュネーヴである。そのイメージを作るのに、父親もまたあずかって力があつた。『ダランベールへの手紙』のなかの長い註で、ルソーはサン＝ジェルヴェの広場でのお祭りとダンスの情景を描き、男も女も子供も、歓喜としみじみとした感動のうちに祭りを楽しんでいるのを見ながら、父親もまた感動に身をふるわせて、息子にいった言葉を記している。

「ジャン＝ジャック、お前の故国を愛しなさい。あの善良なジュネーヴ人たちを。みんな友達だ。みんな兄弟なのだ。この人たちのあいだには喜びと和合が支配している。お前はジュネーヴ人だ。お前もいつかは他の国の人を見るだろう。だがお前が父親と同じように旅をすることがあっても、このような国民に出会うことは決してないだろう。」⁽³⁰⁾

ここでは市民の誇りが、郷土愛となつて昇華している。ジュネーヴは他に並ぶもののない共和国で、ルソー家はいま貧しく、落ちぶれてはいるが、その市民、つまり主権者なのだ。父親の言葉どおり、やがてルソーは一七二八年、十六歳でジュネーヴを飛び出すのだが、フランスに住むことでジュネーヴの実態を知らず、今後三十年近くの長いあいだ、このジュネーヴ幻想を心にいだき続ける。

三、思想形成とジュネーヴ幻想

ジュネーヴを出たジャン＝ジャックは、文字通り完全に無一物で、着のみ着のままだつた。城外まで会いに来

てくれたいとこのベルナルも、ささやかな銭別をくれただけで、引きとめるわけでもなく、いわんやいっしょに行こうとはいわなかった。「いつのまにか違つた習慣を持つようになり……彼は山の手の坊ちゃんで、私は身分の低い徒弟、サン＝ジェルヴェの子にすぎなかった。生まれは同じでも、われわれの間はもう平等ではなかった」⁽³¹⁾のである。

天涯の孤兒となつたルソーにも、なお「市民の誇り」の根拠は失なわれてはいなかった。ジュネーヴを出て、ポンヴェール司祭のもとにたどりついた彼は、「ポンヴェール氏が貴族であつたとはいへ、学識はたしかに私の方があつた」⁽³²⁾ことに気がつく。市民にふさわしくあろうとして学んだ読書のおかげで、十六歳のルソーは、田舎の司祭よりも高い教養を身につけていた。ここまで来れば、どんなに境遇が落ちても、誇りを失うことはもうない。

その後トリノで、グーヴォン家の下僕に雇われる時も、ルソーの最初の反応は、「なんだ、やっぱり下僕か」と口惜しさをかみしめる。しかし、「やがて自信によつてそれは消えた。そのままにしておかれるほど、そんな地位に向いていないと、身に感じていた」⁽³³⁾という。事実、彼はたんなる下僕扱いにはされなかった。その上、ある日の食卓で、ソラール家の銘句をめぐる、貴族たちよりも彼の方が、学識があることを示す。のちになつて、この時をかえりみた彼はいう。

「それは事物を自然の秩序のなかに置き直し、運命の侮辱によつて卑しめられた才能のために、仕返しをしてくれる、あのまことにまれな瞬間のひとつであつた」⁽³⁴⁾

つまり、「自然の秩序」というものが、もしもあるとすれば、ルソーの方が上位にあるのだが、現実の「社会

の秩序」では、彼は下僕であり、相手は貴族たちだというわけである。

その後ルソーは、アヌシーでもシャンベリーでも、とりわけシャンベリーの郊外のシャルメットでは、大いに努力して読書、研究にはげむ。音楽、哲学、歴史、地理、数学、化学、ラテン語、天文学とその領域は広い。当時彼がどんな本を読んでいたかは、『告白』第六巻にくわしく記されており、またこの時期の作品である『ヴァラン夫人の果樹園』では、彼の研究を導く著者として、プラトンからフォントネルにいたるまで、約三十人の文学者、思想家、科学者の名前をあげている。⁽³⁵⁾さらに、一七三六年六月に、ジュネーヴの書店に注文した本の一覧表も残っている。⁽³⁶⁾それらを見ておどろくのは、ルソーの意欲と努力が並みのものではないことである。このエネルギーはどこから出てきたのであろうか。

『告白』第六巻が語るところによれば、シャルメットにいた時期のルソーは、自分の命がそう長くはないと思うほど、身体のを衰えを感じていた。しかしながら彼はいう。「私の身体の状態にもかかわらず、あるいはむしろその状態のゆえに、ある抗しがたい力によって、少しずつ研究の方へと引かれていった。」また「最後の時まで、学ぶのが立派だと思われたのか、または生きる希望の残りが心の底に隠れていたのか、死を待つ気持は研究への興味を弱めるどころか、盛んにしたようだ」⁽³⁷⁾ともいつている。

シャルメット以後、一七五〇年に『学問芸術論』を出すまでのルソーは、徐々に思想を形成していくが、彼の思想の特色は、学問・芸術の目的をたんに真理探求だけではなく、学ぶものの徳性を養ない、高めることと考える点である。場合によっては、学問・芸術がなくても、人間は徳高くありうるとさえ彼は考える。この思想の源流はいうまでもなく、ギリシア、ローマの都市国家の徳高い市民、賢人についての読書、とりわけプルタルコス

からえた知識にあったが、同時に、学問・芸術が栄えながら、人びとに徳がない当代のパリに対する批判でもあった。

ルソーの眼には、このギリシア、ローマの徳高い市民たちの物語はそのまま、都市国家ジュネーヴの市民に求められるべき資質を表わしていると見えただろう。しかも彼自身がその「ジュネーヴ市民」、つまり主権者であり、爲政者ともなりうる資格を持った人間だった。かくして彼の心の中には、もう長い間住んだことのない現実のジュネーヴに代って、理想のジュネーヴが形成され、幼時の思い出は美化されて、その肉付けの材料となった。その上、彼がパリで見た学問・芸術のあり方が反面教師となつて、幻想のジュネーヴを作り上げるのに役立ったのである。

すでにルソーがアヌシーに住んでいた時期に、ヴァラン夫人がパリに行つて留守の間、彼は女中のメルスレをフリブルまで送って行く途中、ジュネーヴを通る機会があつた。その時の感想を『告白』で見ると、彼の心のなかには現実とは違つた、きわめて情緒的な「理想のジュネーヴ」がもうでき上つていたことが分かる。一七三〇年七月のことであつた。

「この幸福な都市の城壁を見、そこに入るとき、感動のあまり、ある失神のようなものを感じなかつたことはけつしてない。自由の気高い映像が、私を高めると同時に、平等、団結、風俗の穏やかさの映像に、私は涙が出るほど心を打たれた。⁽³⁸⁾」

もっとも、『告白』のこの文章を書いた時、ルソーはすでに夢から覚めており、つぎのように書き加えた。

「なんと思ひ違いしていたことだろう。だが思ひ違いは当然だったのだ。私はそれらすべてのものが、自分の

心から発していたので、自分の祖国のなかに見るような気がしていたのである。⁽³⁹⁾

ルソーの「ジュネーヴ幻想」が頂点に達するのは、『不平等起源論』につけた「ジュネーヴ共和国に」と題する献辞である。このかなり長い文章のなかで彼は、自由で、立法権がすべての市民に共有の、「民主的な共和国」に、最大級の賛辞を呈している。その内容と現実のジュネーヴとは、まさにさかさまであつたにもかかわらず、ルソーは大まじめで、ジュネーヴを賛美しているのだ。もしも同じことをヴォルテールが書いたならば、痛烈な皮肉、激しい批判と受けとめられたであろう。事実、ジュネーヴの首席市長ジャン・ルイ・デュパンは、ルソーに宛てて、一七五五年六月十二日付で、つぎのような手紙を送っている。

「あなたは献辞のなかで、ご自身の心の動きにしがいました。そして私は、あなたがお世辞を使いすぎていると、人から見られるのではないかと心配です。あなたはわれわれのあるべき姿を示したのであつて、ありのままを示してはおられません。⁽⁴⁰⁾」

ずっとこのちになつて、ルソーの父親の旧友で、ルソーとも親しかったマルセ・ド・メジエールは書いている。
(一七六〇年七月三十日)

「身分の平等についてのあなたの本は、身分の高い人、低い人、われわれすべてに献げられましたが、身分の高い人の氣に入るといふ幸運はえられませんでした。⁽⁴¹⁾」

ルソー自身も『告白』のなかで、この「献辞」へのジュネーヴの反響について、つぎのように書いている。

「反響は好意的ではなかった。そしてその献辞も、もつとも純粹な愛国の情から書いたのに、会議のなかには敵を、町民のなかには嫉妬する人間を作っただけだった。当時首席市長だったシュエ氏は、丁重だが冷たい手紙

をくれた。⁽⁴²⁾」

四、失望、しかし心に残る誇り

実をいえば、ルソーは十六歳でジュネーヴを出た直後、トリノでカトリック教に改宗していたので、「市民」の資格を失なっていたのだから、『学問芸術論』を出した時点において、「ジュネーヴ市民」ではなかった。そこで『不平等起源論』を出すにあたり、「ジュネーヴ共和国に」という献辞をつけて、ジュネーヴを訪問して新教徒に戻り、一七五四年八月二十五日には市民の資格を得るが、外国に居住しているのだから、正確に言えば町民となったわけである。しかし同時に、ジュネーヴでは彼をかならずしも歓迎しない人もいることを知る。このあたりからジュネーヴの現実を認識するようになって、ルソーの幻想も崩れはじめる。そして、ジュネーヴにおけるヴォルテールの影響の強さを知った彼は、ジュネーヴに住む計画を中止して、またパリに帰る。

一七六二年六月九日、『エミール』がソルボンヌで焼かれ、著者逮捕の命令が出ると、ルソーはスイスへと逃れるが、ジュネーヴでもまた『エミール』は禁止され、逮捕令が出る。パリに遅れること、わずか十日であった。⁽⁴³⁾それでもジュネーヴには、ルソーの支持者が大勢いる。ルソーはその人たちの反撃を期待した。しかし、その人たちは沈黙を守ったのである。

スイスにいながらジュネーヴ領に入らず、一年間待ったルソーは、ついに故郷に帰る希望を失い、一七六三年五月十二日、みずから町民の権利を放棄する旨の手紙を、ジュネーヴ市長に送る。歴史上、有名な文学者が自分

の祖国を、自分にふさわしくないと宣言して捨てたのは、これがはじめてではないだろうか。彼はヨーロッパ中が見守るなかで、故郷のジュネーヴに平手打ちを喰わせたのであった。五月十九日、ジュネーヴの小会議は、この宣言を記録にとどめたが、なんの註釈も意見もつけ加えなかった。「誇り高き市民」は、もはや市民ではなくなったのである。

ルソーの「市民の誇り」は終わったのであろうか。たしかに『エミール』以後彼は、自分の著作に「ジュネーヴ市民」の肩書をつけるのはやめた。しかしながら、ジュネーヴの現状に失望したとはいえ、彼の心のなかに作り上げられた「理想の共和国」は生き続け、そこで市民の家に生まれたのだという誇りは、消えなかったようである。一七六五年三月頃から書きはじめ、二年後の夏に完成した『告白』第一部では、さきに引用したように、彼は市民の父と市民の母との間に生まれたと記している。

最後に、ルソーが最後まで誇り高き市民の意識を持ち続けた、もうひとつの重要な理由として、理想の共和国が、ルソーの生きたフランスの陰面であったことも見逃せない。一七四二年の夏、パリに住むようになってから、彼はたえず周囲の人びとと自分が、根本的に異質だと感じていた。「われはこの地にて異邦人なれば、理解されざるなり」というオヴィディウスの詩句を、『学問芸術論』と『ルソー、ジャン・ジャックを裁く』の二つの作品の扉に、彼は記している。彼がはじめて世に知られた作品と、死の二年前に完成した作品に、同じこの詩句をつけたというのは興味深い。

社交的で会話がうまく、エスプリに富んだパリの人たちのなかで、孤独と夢想を好み、人前ではうまく口もきけず、きまじめなルソーは、確かに異邦人だったが、とりわけ、フランス国王の「臣下」たちのなかで、彼はひ

とり「市民」であり、主権者であった。それを強く意識しながらルソーはたえず、誇りとともに「われは市民なり」と思い続けたのではないだろうか。

註

- (1) *Œuvres Complètes de J.-J. Rousseau*, t. I, p. 6, *Bibliothèque de la Pléiade*. (以下O. C.と略す)
- 『ルソー全集』(白水社) 第一巻 一四ページ(以下『全集』と略す)
- (2) プレイアッド版ルソー全集の註によれば、ルソーが『学問芸術論』の扉に、「ジュネーブ市民」と記したのは、バリおよびトワールーズの同名者ルソーと区別するためだったとある。そういう必要もあっただろうが、それだけの理由で、その後の多くの作品にも「ジュネーブ市民」と書くのだろうか。Cf. O. C. III p. 1239
- (3) たとえば, François Jost, *Jean-Jacques Rousseau suisse*, 2 vol, 1961
そのほかにも、ジュネーブのルソーへの影響についての研究は多い。
- (4) O. C. I, p. 5 『全集』第一巻 一三ページ
- (5) Cf. Jean Senelier, *Bibliographie générale des œuvres de J.-J. Rousseau*, 1950
Album Rousseau, *Bibliothèque de la Pléiade*, 1976
- (6) なお『学問芸術論』のあとに論争むすび J.-J. Rousseau de Genèveと署名している。
- (7) M. Launay, *Jean-Jacques Rousseau, écrivain politique*, 1971, p. 163
- (8) O. C. t. III, p. 7 『全集』(白水社) 第四巻 一三ページ
- (9) E. Ritter, *La famille et la jeunesse de J.-J. Rousseau*, 1925, p. 23. in *Annales J.-J. Rousseau* XVI
Olivier krafft, *Les classes sociales à Genève et la notion du citoyen*, in *Jean-Jacques Rousseau et son œuvre*, 1964

- (10) この推定の数字は研究によって相違があるが、当時は人口調査がなかった。一七八一年にはじめての人口調査があり、男子の市民、町民を合わせて、二九六五人で、全男子人口の二六パーセントを占めていた。Cf. M. Launay, op. cit. p. 36
- (11) したがって、ルソーが母親のことを「市民」と書いたのは、正確にいえは誤りである。
- (12) D. Mornet, J.-J. Rousseau, l'homme et l'œuvre, 1950, p. 11~12
- (13) J.-S. Spink, Jean-Jacques Rousseau et Genève, 1934, p. 15
なお、ビエール・ファチオ自身は、貴族的な家の出身であり、二百人会議のメンバーでもあった。
- (14) Raymond Trousson, Jean-Jacques Rousseau, t. 1, La marche à la gloire, 1988, p. 20
M. Launay, op. cit. p. 13~43
- (15) ただ「カ所だけ、『告白』第一巻に、幼年時代「年とって人の好い私のお祖父さんの真似をして」時計を作ったり、絵をかいて遊んだ」という言及がある。
O. C. I, p. 29 『全集』第一巻、二九ページ
- (16) J.-S. Spink, op. cit. p. 13
- (17) O. C. I, p. 216 『全集』第一巻、二三九ページ
- (18) M. Launay, op. cit. p. 48
- (19) Maurice Cranton, The early life and work of Jean-Jacques Rousseau 1712-1754, 1982, p. 15
なおイザーク・ルソーの兄弟姉妹は、『告白』によれば十五人とあるが、実際は十四人で、そのうち生き残ったのは、男三人、女三人で、イザークはその二男。
- (20) 彼はこの家を三二五〇フロリンで売るが、厳密に言えばそれはジャンリジャックと兄への母からの遺産であった。しかしジャンリジャックが成年（二十五歳）になった時、父から受けとったのは、「なぜか減らされて、非常に少なくなっている」六五〇フロリンであった。
O. C. I, p. 246 『全集』第一巻、二七二ページ
M. Cranton, op. cit. p. 23 R. Trousson, op. cit. I, P. 143
- (21) O. C., III, p. 118 『全集』第四巻、一八六ページ

- (22) この時代のシェネーヴの職人の家にあった蔵書については、M. Cranston, op. cit. p. 24
- (23) O. C. II, p. 1137 『全集』第十一卷、三十四ページ、松田清氏訳
- (24) O. C. I, p. 10 『全集』第一卷、一九ページ
- (25) O. C. I, p. 61 『全集』第一卷、七三ページ
- (26) O. C. I, p. 39 『全集』第一卷、五〇ページ
- (27) O. C. I, p. 41 『全集』第一卷、五二ページ
- (28) O. C. I, p. 9 『全集』第一卷、一七ページ
- なおルソーのフルタルコスへの愛着は、『孤独な散歩者の夢想』の第四の散歩、およびマルゼルブ氏宛一七六二年一月十二日付の書簡にも見られる。
- (29) 同上
- (30) Lettre à D'Alembert sur les spectacles, éd. par M. Fuchs, p. 182 『全集』第八卷、一六三ページ、西川長夫氏訳
- (31) O. C. I, p. 42 『全集』第一卷、五三ページ
- (32) O. C. I, p. 46 『全集』第一卷、五七ページ
- (33) O. C. I, p. 92-93 『全集』第一卷、一〇六ページ
- (34) O. C. I, p. 95-96 『全集』第一卷、一〇九ページ
- (35) O. C. II, p. 1124-1129 『全集』第十一卷、一一一—一一三ページ
- (36) F.-C. Green, J.-J. Rousseau A critical study of his life and writings, 1955, p. 54
- (37) O. C. I, p. 232-233 『全集』第一卷、二五七ページ
- (38) O. C. I, p. 144 『全集』第一卷、一六三ページ
- (39) 同上
- (40) Correspondance complète de J.-J. Rousseau, éd. R. A. Leigh, III, P. 136-137
- (41) op. cit. XII, p. 132
- (42) O. C. I, p. 395 『全集』第一卷、四一七ページ

このほかにも O. C. I, p. 581 『全集』第二巻、二〇八ページ

ただし研究者のなかには、ジュネーヴの反響は好意的だったという人もいる。

M. J. Gaberel, Rousseau et les Genevois, 1858, p. 33

(43) 『告白』には六月十八日とあるが、正しくは六月十九日である。

O. C. I, p. 590 『全集』第二巻、二一八ページ

(44) *Barbarus hic ego sum quia non intelligor illis*

本稿において、註で訳者名をあげて引用させていただいた以外は、すべて拙訳である。

（フランス文学科 教授）